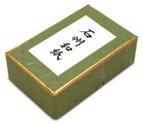
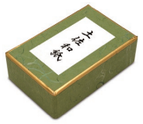
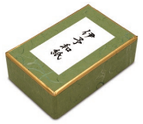
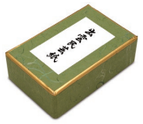
和紙名刺ラインナップ

コード	製品名	入数※2	紙厚イメージ	箱
105041	名刺 黒谷和紙 4号※1	100枚		
105059	名刺 越前和紙 耳付	100枚		
105051	名刺 石州和紙 耳付	100枚		
105052	名刺 土佐和紙 耳付	100枚		
105053	名刺 伊予和紙 耳付	100枚		
NEW 105060	名刺 美濃和紙	100枚		
105055	名刺 小川和紙 耳付	100枚		
105056	名刺 出雲民芸紙 4号	100枚		
105057	名刺 軍道紙 耳付	100枚		

※1 こちらの製品の旧名称は「名刺4号 古代」です。 ※2 各製品には予備が2枚付いております。

●耳付名刺は一枚漉のため、サイズに誤差が発生いたします。

サンプルをご用意しておりますので、弊社担当営業までお問い合わせください。

YAMA ZAKURA

株式会社 山櫻 https://www.yamazakura.co.jp

本社／〒104-0041 東京都中央区新富2丁目4番7号

支店／東京・中野・五反田・浅草・墨田・横浜・千葉・大宮・大阪・名古屋・福岡

2309-SJ

＜山櫻が見つけた全国各地の和紙名刺＞

山櫻

縁（えん）と風合いを贈る 和紙名刺

黒谷和紙（京都府）

越前和紙（福井県）

石州和紙（島根県）

土佐和紙（高知県）

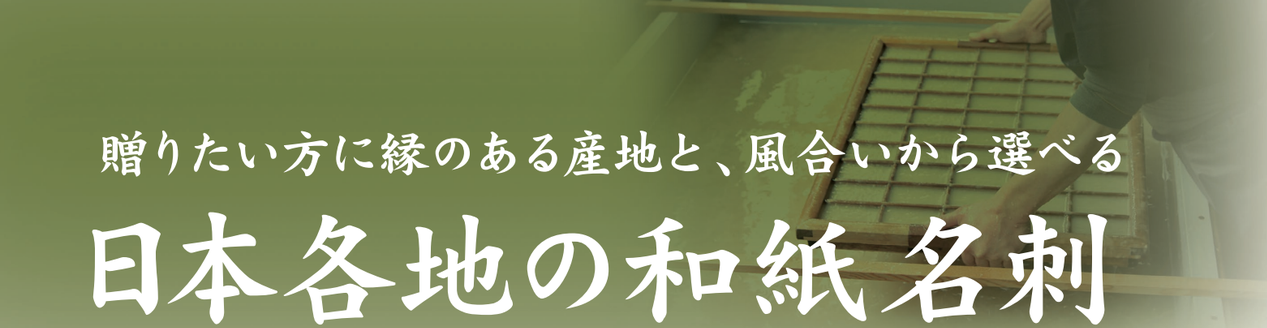
伊予和紙（愛媛県）

美濃和紙（岐阜県）

小川和紙（埼玉県）

出雲民芸紙（島根県）

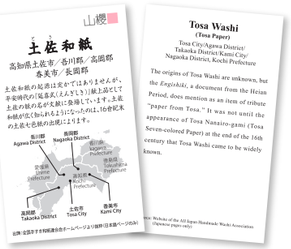
軍道紙（東京都）



贈りたい方に縁のある産地と、風合いから選べる

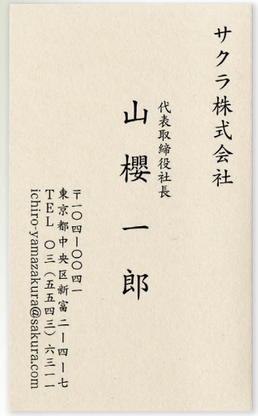
日本各地の和紙名刺

日本有数の和紙の産地である越前や美濃など、一枚ずつ手漉きで仕上げられた高級和紙名刺を揃えました。
雁皮（がんぴ）、三椏（みつまた）、楮（こうぞ）などを主原料とし、産地ごとに色味や風合いも様々です。
お好みの風合いや、贈る相手に縁のある産地でお選びいただけます。



名刺箱に、産地情報のカードを同梱しております。
（英語表記付）

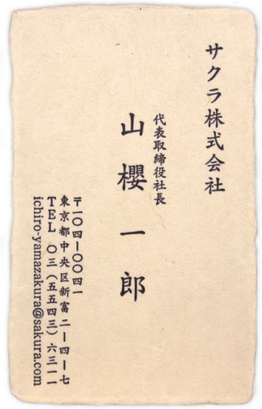
美濃（みの）和紙 NEW



岐阜県美濃市

美濃における最初の紙は、現存するものとしては大宝2年（702）の戸籍用紙で、美濃（御野）、筑前、豊前のものが正倉院に残されています。江戸時代になって生産量もますます増大し、近江の商人らにより美濃紙は中央に進出するようになります。書院紙として代表的な「美濃紙」は、その優れた抄紙技術に支えられて、全国数ある障子紙の中でも折紙付きとなり、現在の「美濃紙」ブランドの根源となっているものです。

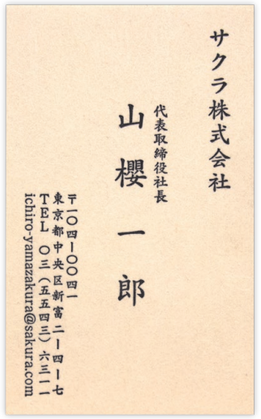
石州（せきしゅう）和紙



島根県浜田市三隅町

石州和紙は島根県の西部（石見地方）の地域で漉かれています。寛政10年（1798）に発刊された国東治兵衛の著書『紙漉重宝記（かみすきちょうほうき）』によると「慶雲・和銅（704～715）の頃柿本人麻呂が石見の国の守護で民に紙漉きを教えた」と記されており、約1300年もの間、石見地方では手漉き和紙が漉き続けられ、守られてきました。

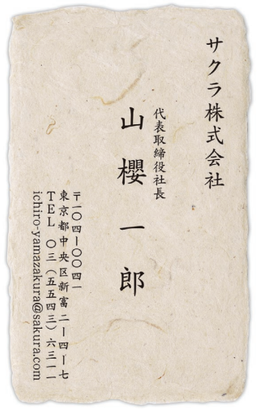
黒谷（くろたに）和紙



京都府綾部市黒谷町

黒谷和紙の歴史は定かではありませんが、古く平家の落武者などが子孫へ残す技として始めたといわれています。江戸時代には旗本領となり、文化と産業の発展につれて紙会所も設けられ、数々の奨励策がとられて発展し、京都に近いこともあって、京呉服に関連した紙が多くつくられていました。今では全国でも数少ない純粋の手漉き和紙の産地として世界的にも名を知られ、貴重な存在となっています。

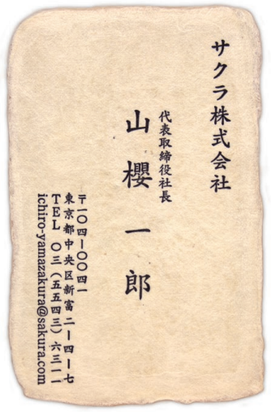
土佐（とさ）和紙



高知県土佐市／吾川郡／高岡郡
香美市／長岡郡

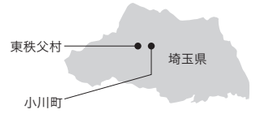
土佐和紙の起源は定かではありませんが、平安時代の『延喜式（えんぎしき）』献上品として土佐の紙の名が文献に登場しています。土佐和紙が広く知られるようになったのは、16世紀末の土佐七色紙の出現によります。

小川（おがわ）和紙

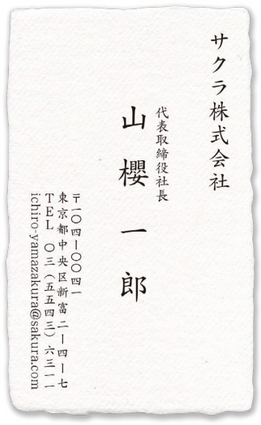


埼玉県比企郡小川町
秩父郡東秩父村

武蔵国紙（むさしのくにがみ）の名は『図書寮解（ずしょりょうげ）』（774）にも記され、『延喜式』（924）には紙を貢ずる国44ヵ所の一つとされていることから、この地でも古くから紙が漉かれていたことがわかります。もとは和歌山県の高野町細川で漉かれていたといわれる細川紙がこの地で漉かれるようになったのは、江戸時代、需要の増した細川紙の代替として江戸に近いこの地で同質の紙を漉かせ、その紙に細川の紙名をつけたというのが定説となっています。



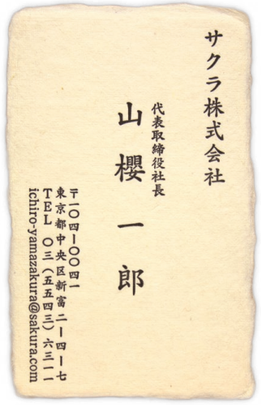
越前（えちぜん）和紙



福井県越前市

今から1500年ほど前、継体天皇が越前におられ、男大迹（おおとの）皇子と呼ばれていた頃、この村里の岡太（おかもと）川の上流に美しい姫が現れて「この地は清らかな水に恵まれているから、紙漉きをして生計を立てよ」と、紙漉きの技を里人に教えたといわれます。人々はこの姫を「川上御前」とあがめ奉り、岡太神社を建ててお祀りし、紙漉きの技を伝え今に至るといわれます。

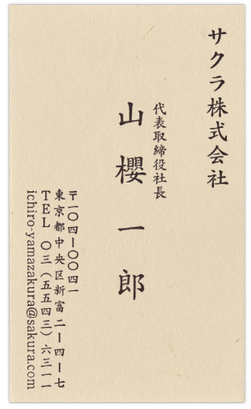
伊予（いよ）和紙



愛媛県四国中央市

伊予和紙の起源は宝暦の中頃、平野部に3戸の紙屋が生まれているところから、約240年の歴史とみるのが妥当と思われます。他産地のように藩の保護・奨励もなく、江戸時代後期から明治にかけて、農家の副業として紙づくりが行なわれていました。
※宝暦年間（1751～1763）

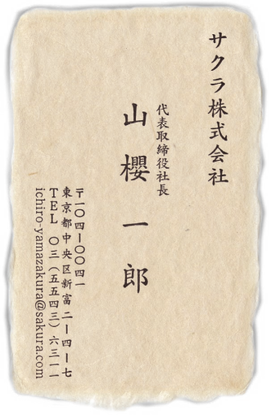
出雲（いずも）民芸紙



島根県松江市八雲町

出雲の国は、天平9年（737）の正倉院文書『写経勘紙解（しゃきょうかんしげ）』にも出雲の紙の名が見えるように、歴史は古く、天平の昔にさかのぼります。近世に入ってからは、松江藩主松平直政が越前より紙漉きの工人を招いて、松江郊外の野白に御紙屋を設けたのに始まります。続いて直政の子、近栄が、広瀬町字祖父谷（おじたに）に松江藩の工人を移住させ、御紙屋としました。

軍道（ぐんどう）紙



東京都あきる野市

軍道紙の起源は、大坂夏の陣の落武者が、先陣の旗指物の大旗に使用する紙を漉いたもので、この地に紙漉きの技術を伝えたといわれています。江戸中期頃より山沿いの小さな村々で紙漉きが行なわれ、中でも乙津村字軍道が盛んであったので、その地名から「軍道紙」と名づけられました。

出典：全国手すき和紙連合会ホームページより抜粋